様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５９０２７７

研究課題名（和文）高機能自閉症スペクトラム障害のある児童・生徒の性に関する研究

研究課題名（英文）Sexuality of children and youths with high functioning autism spectrum disorder

研究代表者
萩原　拓（Hagiwara, Taku）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：００４３１３８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高機能自閉症スペクトラム障害（HFASD）のある個人の性発達に関する研究の展望及び実態調査に焦点を当て、特性把握及び問題の予防・解決につながる支援手段の開発の出発点となるべく、調査・分析を行った。まず、HFASDの性に関する科学的エビデンスは寡少であり、特に英語圏において出版されている書籍は当事者エピソードや臨床的実践が中心となっている。また、本研究ではHFASD当事者に対するアンケート、インタビューを行い、HFASDの性行動は定型発達とほぼ変わらない点が多い反面、その中核特性によって外部からは分かりにくい形で思春期のつまづきが成人期までの問題に発展する可能性もあることが確認された。

研究成果の概要（英文）：The study focused on sexuality of individuals with high-fuctioning autism (HFASD) as a starting-point to develop intervention for those population. Specifically, the study investigated current research and characteristics of HFASD in sexuality. First, the study found scarce scientific evidences regarding the study theme. Many of published articles are based on episodes of individuals with HFASD and reports by clinicians. Next, the study conducted several questionnaires and interviews to individuals with HFASD. Results suggested many aspects of their sexuality are not largely different from neurotypical population; however, the core characteristics of ASD may be related to issues in adolescence and these may become major problems in adulthood.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉症スペクトラム障害

１．研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害（ASD）は、DSM-5の診断基準によれば、①社会的コミュニケーションと社会的相互交渉の問題、②限定された、反復的パターンの行動、興味、活動、の2つの主な特性を持っている。しかし、この特性を持っている個人差は非常に大きく、認知機能レベルにしても、重度の知的障害が併存しているものから、平均域またはそれ以上のものまで幅広い。正式な診断名ではないが、一般的に、知的障害を持たないASDは高機能自閉症スペクトラム障害（HFASD）と呼ばれる。現在、HFASDのある児童・生徒のほとんどは通常学級に在籍している。彼らがもつ困難性は学習、社会的行動・ふるまい、教師や友人との関係、自己調整、自尊感情の発達など多岐にわたる。最近の研究の発達によって、HFASDへの支援は飛躍的に進化しているが、この障害の困難性を性行動に関連させた研究や実践はほとんど見られない。寡少ながら存在するASDの性に関する研究報告は、知的障害を有するものが主な対象となっており、HFASDの性に焦点を当てた研究は海外でもほとんど見られない。我が国の性教育は国際的にみても先端を行くものではなく、まして障害のある児童・生徒の性に関する研究や教育的実践は非常に遅れている。そして、現在特別支援教育で支援ニーズの重大性が注目されているHFASDに至っては、かれらの性行動についてほとんど知られていないのが現状である。

本研究は、次の5点の現状と課題を背景とした。

①HFASDが国際的に注目されるようになったのは1990年代であり、アスペルガー症候群の診断基準も９０年代初頭に定められた。我が国でも特別支援教育の発足もあり、HFASDの特性を有すると診断された児童・生徒の数は年々顕著な増加をみせている。この歴史的背景を鑑みると、現在青年期をむかえているHFASDのある人々は、HFASDが教育・支援の現場で認識された「第一世代」であるといえる。つまり、彼らのこれまでの人生や現在の状態を調査することによって、HFASDの児童・生徒の現在から将来までライフステージを通した展望が可能になる。

②性行動や性的問題に関することはタブー視されることが多い。必然的に、顕在化する問題も少なく、HFASDの困難性や課題とされている社会性スキルや行動・ふるまいにおいて性発達や性的嗜好との関連性を指摘されても、系統的調査や支援プログラムの構築という具体的手段にはつながりにくくなっている。しかし、現在青年・成人期をむかえているHFASDのある人々の「生きにくさ」のなかに性に関する悩みは多く、また、彼らの家族や教師・支援者からもHFASDの性に関する疑問は顕在化しない形で大きくなっている。

③HFASDと性犯罪との関連性は未だ明確化されていないが、それらを結び付けようとする動きは少なからず存在する。アメリカなどで、情緒・行動障害や知的障害のある児童・生徒に対する性教育プログラムが研究・実践されている第一の目的は、性加害者や性被害者を防ぐことにある。HFASDのある児童・生徒の多くは普通教育環境におり、人間関係を築く環境は定型発達と何ら変わらない。しかしそのような環境で、定型発達の児童・生徒が体得するような性的な自己調整スキルや自己防衛スキルに比べ、社会的認知力や固執性、さらに特異な性発達の問題を抱える児童・生徒にとってのそれらはかなり脆弱なものである可能性が高いと思われる。

④ASDのみならず、学習障害、注意欠陥多動性障害などの、他の発達障害においても性に関する研究は皆無に等しい。英語圏をはじめとして、知的障害のある人々への性教育や支援は充実している。しかし、知的障害を持たない発達障害の性行動や関連課題は、それらのケースとは異なるものであると捉えるべきである。

⑤HFASDの診断件数や支援対象数が急増している現在、かれらのもつ社会性の困難等に起因する性に関する問題はさらに顕在化し、そして社会的問題になることは大いに予想される。この問題を解析し、より包括的かつ効果性の高い教育的支援プログラムを構築していくことは喫緊の課題であると共に、HFASDのある人々のQOL（生活の質）を促進・保持し、より安定した社会的自立を促すことにつながると考えられる。

２．研究の目的

本研究は、HFASDの特性をもつ児童・生徒の性発達に関する実態調査および性教育に関連する支援手段の模索を主題とした。この分野は国際的にみても事例報告や研究が寡少であるにも関わらず、HFASDのある本人やその家族、また教育者・支援者にとって現在もっとも必要とされている分野である。本研究は以下の2点のスタートポイントとなる実態調査を目的とした。第１に、HFASD独特の性発達パターンおよび性問題に至るメカニズムを実態調査によって明らかにすること。第2には、実態調査結果を踏まえて性教育をはじめとする、HFASDに特化した支援や性犯罪防止（性被害・性加害双方）の方向性を明確化することである。我が国においては、この分野の組織的研究は皆無である。従って本研究は、この分野の研究の活性化、HFASDの性に関するアセスメント手法の開発、具体的支援プログラムの作成・実施などにつながるものであると位置付けた。

３．研究の方法

(1) ASDの性行動に関する先行研究

ASDに関する研究、実践報告の数は、最近国内外において急激に増加しているところであるが、性行動に関連する文献は非常に限

られている。本研究のレビュー作業は、ASD に限らずその近接領域、つまり、定型発達や知的障害、他の発達障害もその対象に含むこととした。具体的なレビュー手段は、①文献データベースを利用しての文献入手、②収集文献の引用文献を手作業による分析・入手、の二つを柱とし、その他学会やワークショップ、フォーラムなどの報告も検索対象とした。性発達や性教育に関する研究は、我が国に比べ、アメリカ、イギリスなど英語圏の方が多く発表されており、必然的に英語文献の取集が主となる。また、HFASD の性に関する英語文献には、事例や性教育カリキュラムなどをまとめた書籍などもあると思われ、それらも検索対象とした。

(2) ASD 当事者を対象としたフォーカスグループ・ミーティング

性に関する情報収集を直接学齢期の当事者や保護者から得ることは、一般的には性関連トピックについて公に語らない傾向があることからも難しいと考えた。そこで、青年・成人期にある HFASD の当事者を対象としたフォーカスグループ・ミーティングを実施し、参加者それぞれの学齢期から現在までを振り返って経験や課題などを話してもらうこととした。

まず、パイロット的に 20 代の HFASD 当事者に半構造化インタビューを行い、それぞれの異性に対する関心や性発達の経験などを個別に尋ねた。このインタビューの結果を踏まえて、フォーカスグループ・ミーティングの方向性を決めた。

フォーカスグループ・ミーティングは 2 回実施し、それぞれ 20 代から 40 代の HFASD 当事者が参加した。また記録者及びファシリテーターとして、大学生 4 人がそれぞれのミーティングに参加した。ミーティングはインフォーマルなディスカッション形式としたが、①性的意識の変遷、②異性への関心、③恋愛・性交渉などのおおまかなカテゴリーで話題の移行を図るようにした。ミーティングルーム内のテーブルや椅子の配置や照明は、参加者の希望に合わせて調整した。また、答えたくない質問には回答する必要がないこと、ミーティングにおける個人情報の秘守について説明し了解を得た。

(3) 当事者へのアンケート

学齢期から青年・成人期の ASD 当事者の夏季合宿において、アンケート調査を行った。まず、性行動に関連する社会性スキル及び日常生活スキルに焦点を当て、当事者と支援者双方にインフォーマル調査を行った。この調査において、アンケート内容の方向性と、実際にどのような内容や形式だと当事者が回答しやすいかという点を分析した。

次年度に、28 項目からなる質問票を夏季合宿の参加者 19 名に実施した。質問内容は、①衛生観念、②友人や恋愛対象など他者に対する認識・願望、③現実とバーチャル双方に対する認識などに焦点を当てた。

４．研究成果

(1) ASD の性行動に関する先行研究

国内の先行研究は非常に限られていた。出版されている論文のほとんどはアンケート等による実態調査であり、また対象も知的障害を持つ子どもに限られていた。このことからも、HFASD の性行動に関する実態は、現在に至るまでほとんど明らかにされていないことが確認された。一方、国内ほどではないが、英語文献においてもその数は決して多くはなかった。報告の多くは、青年・成人期の性に関する問題に焦点が当てられており、学齢期の当事者に関する分析や支援などにつながる報告は見られなかった。このことから、国際的に見ても、HFASD の性行動に関する科学的エビデンスは寡少であり、支援実践も多くの現場で般化可能な段階ではないことが明らかとなった。

しかし、英語で書かれた HFASD の当事者、特に青年期をターゲットとしたマニュアル形式の書籍は増加傾向にあることがわかった。これらの多くは、当事者自身が読むことによって自己理解を促し、それぞれの属する環境（学校等）で実践できるような配慮がされている。しかし、これらの書籍はエビデンスに基づいて編纂されたものではない。

当事者による手記は、国内外を問わず増加傾向にあると言える。これらの中には、必ずしも性がメインテーマではないが、筆者の性に関する実体験や、恋愛・結婚・子育てなどのエピソードが含まれたものもあり、これらによって今まで見えにくかった当事者の性行動の実態や、課題、そして成功につながる手段などを見つけることができる。

ASD の性行動に関しての研究および実践は、国際的に見てもどの国が進んでいるということは言えないと思われる。このテーマにおいて課題となっているのは、情報およびエビデンス不足である。このことは、性というテーマ自体に基準を設けることの難しさがあると考察される。

(2) ASD 当事者を対象としたフォーカスグループ・ミーティング

パイロット的に行った半構造化インタビューには、20 代の当事者 10 名（男性 8 名、女性 2 名)がそれぞれ回答した。質問項目は、①同性の友人の有無、②異性の友人の有無、③恋愛関係にある人の有無、④友人と恋人の違いに関する認識、⑤恋愛時の具体的行動・希望、⑥メディアでの恋愛・性描写に対する意識などであった。回答者の多くは同性・異性の友人がいると答える一方、恋愛関係にある回答者は 1 名のみであった。恋愛関係を持つことに対して積極的願望を持っている回答者は半数であったが、あとの半数にはアニメなどの二次元の世界で異性との恋愛を想

像する方がより安心できる傾向が見られた。また、2 次元のアニメキャラクターに対して、現実的に恋愛関係を持っていると認識している回答者もいた。

第 1 回フォーカスグループ・ミーティングには、20 代から 40 代までの当事者 7 名（男性 2 名、女性 5 名）が参加した。このうち、男性 1 名は性同一性障害により性転換後の性別である。4 名の大学生は、記録及びファシリテーターとして参加した。このミーティングでは、性行動のみに焦点を絞ると参加者が話しにくいと思われたため、学齢期から現在までの対人関係や学校や職場における適応などから話を進めていった。参加者全てが、何らかの対人関係のトラブルを各ライフステージにおいて経験しており、そのうちの数名は抑うつなどの精神疾患による治療を受けたエピソードを持っている。しかし、ほぼすべての参加者が他者との付き合い方に関して自分なりの対処法を現在は持っていた。女性参加者には、同性との付き合い方がわからなかったケースが多く、「女らしい」振る舞いや女性同士の付き合いが理解できず、孤立した学齢期を送ったという共通点が見られた。また、感覚過敏による環境適応問題は、成人期になるにしたがって深刻化するケースがあり、そのことによって異性との身体的接触を避けてしまうことがわかった。逆に、身体的接触を求めてしまう傾向がある参加者もおり、このようなケースでは、特に恋愛感情がないのに他者から恋愛関係を迫られてしまう。男性参加者は、女性と付き合いたい願望はあり、相手に振る舞いや気遣いをするが、逆効果となることが多いと答えた。一方、女性参加者は、笑ったり、近距離にいたりすることで男性に言い寄られて困るケースが多かった。両性とも、相手に対して微妙な言動の調整が難しいことがわかった。

次年度の第 2 回フォーカスグループ・ミーティングには、20 代から 40 代までの当事者 9 名（男性 3 名、女性 6 名）が参加した。4 名の参加者（男性 2 名、女性 2 名）は前回のミーティング参加者である。1 名の女性参加者は既婚者であり、子どもがいる。前回同様、4 名の大学生が記録及びファシリテーターとして参加した。このミーティングでは、まず男性と女性が分かれてディスカッションを行い、その後に全体ディスカッションとなった。

性的意識の変遷であるが、ASD 特性である暗黙のルールを理解することの困難性が大きく影響している。同性に対しても異性に対しても、相手の気持ちを汲み取らない発言をしたり真意と違っても常識的な発言をすることができないことなどによって、違和感を感じさせたり、自身もそれを感じている。しかし、身体的発達により、特に女性は二次性徴における顕著な身体的変化によって、同性に対して自らも同じだという認識に至る。また、性行為の場面において、自分と異性の身体的違いを視覚的に確認することによって、異性を意識できたエピソードもあった。つまり、視覚的な認識や具体的体験が性的認識のきっかけとなっており、会話や読書などからは認識が難しいことがわかる。また、友人など他者からの評価は、自己認知が不足している自身の性的認識を高める上で効果的だったとのエピソードがあった。しかし、過度に他者評価を意識することによって、自分では不可能なことがストレスとなったり、他者の教示による一般的な服装や化粧などが、感覚過敏によって困難となることもある。さらに、学齢期において保護者から性行動についての指摘を受けていない場合、社会に出てから自身の周囲との違いに気づき、戸惑う危険性もあることが示唆された。他者との交流が少なくなりがちな当事者の場合、家庭において性的認識に関連する支援が求められる。

異性への関心については、定型発達者との差異は見られなかった。男性も女性も学齢期から異性への関心を持つようになり、友人との会話や漫画などのメディアから知識を得ようとしている。しかし、性的意識の発達と同様、他者評価は大きな助けとなっており、より具体的かつ的確な評価がここでは求められる。一方、異性への関心が低い、または他者評価を得る機会が少ない当事者には、積極的な視覚的介入が学校や家庭に必要であると本ミーティングの参加者は提言していた。学校や家庭での性教育においては、身体的認識や衛生観念などは当事者に役に立っているが、性行為についてはネガティブな印象を与えかねない可能性がある。特に HFASD 当事者の場合、善悪などはっきりした区分けで物事を認識しやすいため、なぜ良くないことなのか論理的説明を加えるべきである。

恋愛・性交渉については、異性への好意というよりは、相手との会話や時間を一緒に過ごすということが優先される傾向にあった。性行為は、当事者のパーソナルスペースが破られること、特に女性当事者は男性主導への戸惑い、また、行為そのものに見通しがないことからの不安などの意見があった。しかし、性行為は愛情表現であるとの認識を持ち、また相手の肌との接触が好きであることから決して嫌いではないという意見もあった。これらの結果は前回調査と同様であった。性行為は単なる肉体的関係で成立する可能性もあり、コミュニケーションに困難のある ASD 当事者にとっては楽である一方、性行為のみを目的として相手に利用されてしまう恐れも存在する。

同棲や結婚など、相手と一緒の暮らしをする場合、相手のみならずその家族や友人などとの関わり、また、結婚式や出産などの際にそれぞれのやり方や価値感が違うことがストレッサーとなる可能性も示唆された。既婚者の当事者からは、日常生活に一人きりになる時間を作ることを家族に認めてもらうことで、家庭で妻・母親の役割をこなせている

との意見があった。
　このミーティングでは、恋愛や性交渉の経験がある当事者がほとんどであったが、そのような経験が成人を過ぎた現在まで全くなかった者もいた。彼らは全く異性に対して興味や欲望がないわけではなく、そのような機会を得ることが出来ず、パートナーがいないということに大きな心の負担を抱えていた。
　これらのフォーカスグループ・ミーティングから、HFASD 当事者から貴重なデータを得ることが出来た。特に、学齢期から成人期までのエピソードから、現在の学齢期にある当事者に必要な性教育や支援などの示唆を得ることが出来た。

（3）当事者へのアンケート
　予備的に実施した調査では、特に小・中学性の女子に関しての性行動の実態に関するインフォーマル調査と支援者側の課題についての情報収集および協議を行った。HFASD のある女性は大人になってもファンタジーを持ち続けている人が多いが、本調査対象の女子にはファンタジーを強く持っている子どもが多く、それが異性に対する価値観や行動を制限していることが示唆された。つまり、自身が持つファンタジーが固定観念となり、それらと現実の異性との相違によって、向社会的行動が消極的になったり、また、異性との関係を拒否するという傾向が見られた。支援者との協議では、女性独特の衛生観念や服装、しぐさなどを経験的に学ぶことが難しいことが分かった。このことは、HFASD 当事者の適応行動レベルが彼らの知的レベルよりも低い傾向にあることと密接に関係していると思われる。
　これまで収集したデータをもとに、次年度に6～22歳のHFASD当事者19名(男性11名、女性8名）にアンケートを実施した。定型発達の場合と同様な結果を示している一方、ASD 独特とみられる傾向も結果から判明した。
　衛生観念に関連する質問では、入浴などの習慣はほぼ毎日行われていた。以前実施した社会性に関する調査で多くのASD当事者が鏡を見ない傾向が見られたが、今回の調査では、洗面や身づくろいの時に鏡を見る当事者は 8 割ほどであった。しかし、外出時に鏡を見て自身の身なりをチェックする割合は4割程度であった。
　友人の有無に関しては、同性・異性の友人がいる割合は8割以上であったが、全くいないという回答もあった。女性回答者の方が男性回答者よりも多く友人がいると回答する傾向が見られた。一方、9 割の回答者に好きな人、または付き合っている人はおらず、他者と恋愛関係を持ちたいという願望も5割弱であった。さらに、結婚や家庭を持つことに対する願望も5割程度にとどまった。しかし、8 割の回答者はずっと一人で暮らしたいとは思っていなかった。
　アニメなどのバーチャルの世界に対する認識において、5 割の回答者がアニメキャラクターの方が人間よりも好きだと回答した。しかし、アニメの世界の方が現実よりも住みやすいと思う回答は3割にとどまった。
　回答者は、小学生から成人と幅広くはあったが、年齢的な回答の傾向は特に見られなかった。やはり予備的調査と同様に、現実的な対人関係が実体験により認識できていないと思われるケースや、自己認知が年齢相応のレベルに達していないケースがあり、それらが回答に影響していることが推測される。例えば、「友人」や「付き合っている人」などの概念は、定型発達とずれている場合も考えられ、自身はそう思っていても実際には相手との相互認識が成立してないケースもある。また、バーチャルの世界の方が落ち着けるというケースも年齢に関係なく存在し、これは必ずしも現実逃避的なものではなく、ASD 特性に密接に関連した傾向であるとも分析できる。

（4）総合考察
　本研究は、①国内外のASDおよび近接領域障害の性発達、性教育、また性的問題に関する研究、実践の精査、②HFASD に特化した実態調査、③調査結果を踏まえた、アセスメント、性教育プログラムの要因の割り出し、④性的問題、性被害、性加害につながる特性・要因の分析の4点に関連した研究のスタートポイントして実施された。まず明らかになったことは、HFASD 当事者は定型発達に比べて身体的・生理的発達に大きな違いが見られないが、彼らのセクシュアリティ及び性行動が定型発達と大きく異なるのはその中核特性である、社会的コミュニケーションの特異性に大きく影響を受けていることである。おそらくほぼすべてのHFASD当事者は、乳幼児期から学齢期にかけて定型発達と同じ環境（通常学級など）で過ごす。しかしそこで定型発達と同様の社会的知識獲得、また社会的体験を必ずしも得ているわけではなく、量的・質的にも制限されていると言ってよい。そのことによって、性行動の発達が直接的影響を蹴るであろうことは推測可能である。さらに、これまでの研究で指摘されている低い適応行動レベルからも、HFASD 当事者の性行動の発達、知識獲得、成功・失敗体験が少ないであろうことは説明可能である。さらに本研究の結果は、多くのHFASD当事者の感覚処理に特異性が見られることを支持した。当事者全体に感覚特異性のパターンが見られるわけではなく、感覚関連の困難性は非常に幅広いものではあるが、触覚や視聴覚の過敏性や特定の感覚刺激の不足によって自己不安定になるなどの報告が得られた。この感覚特異性が、HFASD 当事者の適応行動レベルの低さを説明する重要な要因であると推察できるのと同時に、彼らの性行動を制限し、また特異なものとしている可能性も高いことが示唆される。

今後の研究の方向性としては、HFASD 当事者の性行動のアセスメント及び支援には、ASD 特性を十分に考慮したものでなくてはならず、また認知機能、適応行動、感覚特性などの分野を取り入れた、包括的アプローチを模索していくことが考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①萩原拓、適応行動としてのソーシャルスキル、アスペハート、査読無、vol.40、2015、pp.96-101
②萩原拓、特別支援教育的見方から－支援方法について、心理学ワールド、査読無、vol.67、2014、pp.13-16
③萩原拓、ASD と適応行動、アスペハート、査読無、vol.37、2014、pp.104-109
④萩原拓、2014、地域で孤立する成人を支援の場にどうつなげていくか、臨床心理学、査読無、14、2014、pp.203-207
⑤萩原拓、発達障害のある子の将来を見据えた支援とは、児童心理臨時増刊、査読無、vol.978、2013、1-10
⑥萩原拓、適応行動の評価、臨床心理学、査読無、vol.13、2013、pp.495-499

〔学会発表〕（計　5　件）

①三宅篤子、萩原拓、岩永隆一郎、向後礼子、発達障害成人に役立つ新しいアセスメントと臨床応用への期待、日本臨床発達心理士会全国大会、2015 年 09 月 06 日、広島国際会議場、広島県広島市
②黒田美保、伊藤大幸、萩原拓、Vineland-II、日本児童青年精神医学会総会、2014 年 10 月 11 日、アクトシティ浜松、静岡県浜松市
③萩原拓、岩永隆一郎、平島太郎、Sensory Profile、日本児童青年精神医学会総会、2014 年 10 月 11 日、アクトシティ浜松、静岡県浜松市
④三宅篤子、黒田美保、稲田尚子、萩原拓、自閉症スペクトラムを中心とした特性へのアセスメントと支援の実際、日本臨床発達心理士会全国大会、2014 年 9 月 13 日、札幌コンベンションセンター、北海道札幌市
⑤三宅篤子、廣瀬公人、黒田美保、萩原拓、秦野悦子、思春期・成人期の自閉症スペクトラム障害の特性理解と併存疾患のアセスメント、日本発達心理学会、2014 年 03 月 22 日、京都大学、京都府京都市

〔図書〕（計　3　件）

①辻井正次　（監修）、萩原拓、岩永隆一郎、伊藤大幸、谷伊織（日本語版作成）、日本版青年・成人感覚プロファイルマニュアル、日本文化科学社、2015、154
②辻井正次　（監修）、萩原拓、岩永隆一郎、伊藤大幸、谷伊織（日本語版作成）、日本版感覚プロファイルマニュアル、日本文化科学社、2015、166
③辻井正次、村上隆（監修）、黒田美保、伊藤大幸、萩原拓、染木史緒（日本語版作成）、日本版 Vineland-II 適応行動尺度マニュアル、日本文化科学社、2014、282

６．研究組織
(1)研究代表者

萩原　拓（HAGIWARA TAKU）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00431388